景観マガジン 埼玉スタイル

S.Style no.5

「映画を活用した地域活性化」 クロストーク

株式会社ティ・ジョイ
小俣 充さん × 埼玉県庁
細田 隆

こうのすシネマエントランス（エルミこうのすアネックス３階）（写真提供：株式会社ティ・ジョイ）

江戸時代は中山道の宿場町として栄え、景観資源も豊富で、埼玉県の「歴史のみち景観モデル地区」として選定され、３８０年余りの伝統を誇る「ひな人形のまち」として、また花卉栽培が盛んな「花のまち」としても、全国にその名を轟かせ、近年では、日本初の市民ホール融合型の、市が所有する映画館「こうのすシネマ」が注目されている鴻巣市。

今回はその「こうのすシネマ」で、市民のための映画館を運営し、映画を活用した地域活性化についての知見を持つ、株式会社ティ・ジョイの小俣 充さんと、埼玉県庁の細田 隆がクロストークを展開。

こうのすシネマを舞台とした官民連携の現場の話から、映画を活用した地域活性化の方向性に至るまで、クロストークは続きます…。

〈「こうのすシネマ」は市の所有、運営は株式会社ティ・ジョイ、といった珍しい映画館。〉

（細田）こうのすシネマは、鴻巣市が所有し、運営を株式会社ティ・ジョイさんがやられている、という全国的に見ても非常に珍しい映画館ですね。

（小俣）そうなんです。こうのすシネマは、弊社においても特殊ですね。映画館は市が所有しています。もともとは別の会社がシネマコンプレックスを経営されてたんですが、東日本大震災で建物が被災してしまいまして、撤退されたと伺っております。

その後、鴻巣市では、中心市街地であるＪＲ鴻巣駅前の活性化を図るために、商業施設であるエルミ

各シアターへ続くコリドー。右手前が多目的ホールＡ、左手前がシアター１（多目的ホールＢ、兼用ホール）

（写真提供：株式会社ティ・ジョイ）

こうのすの方向に人の流れを向けるためにも、２０１２年に市が映画館を取得し、市長さんのリーダーシップで皆さん一丸となり、市民のための映画館を再興されました。

施設は市の所有であり、公の施設ですので、弊社は指定管理者として運営をやらせて頂いています。弊社においても、「こうのすシネマ」以外は、自社もしくは共同で設備投資をして運営しておりまして、「こうのすシネマ」は、市民のための映画館として、劇場の運営だけ行政の指定管理でやらせて頂くというとりわけ珍しいケースだと思います。

（細田）確かに珍しいですね。

〈「こうのすシネマ」は市民のための映画館。鴻巣市とのタイアップイベントが多い。〉

（小俣）劇場内に市民の方が使用できる、多目的ホールも併設されている点は、本当に珍しいと思います。多目的ホールは市民の方のイベントだとか、発表会等に使って頂いておりますが、そういう映画館はなかなかありません。オープンが２０１３年７月でしたので、もう８年位経ちますでしょうか。やはり市民のための映画館なので、鴻巣市とタイアップしたイベントが多いですね。

（細田）タイアップというのは、鴻巣市と一緒にティ・ジョイさんがやってらっしゃる、と。

（小俣）はい、そうです。鴻巣市の子供応援課さんと連携をして、「のびのび子育てフェスタ」を開催し、上映中の出入りは自由で、映画館が初めての小さなお子さんでも楽しめる作品を上映したり、鴻巣

エルミこうのすアネックス外観

市のイベントやキャンペーン等をやらせて頂くことが多いです。

（細田）市民の方に愛されているんでしょうね。

（小俣）はい。市民の方に愛されているからこそ、８年、９年と続いているのかなと感じています。不人気でしたら、もうすでに終わっているかもしれないですし。

（細田）本当に素晴らしいと思いますが、会社の事業として成り立っているのか勝手に心配するところですが（笑）。

（小俣）そこはまあ、ウチもボランティアでやっている映画館ではないので、ちゃんと入場料金も頂いております(笑)。指定管理者ということで、利益が出た場合は市にお戻しする年もあります。

（細田）市民のための映画館ということですが、お客さんはどんな方が多いですか？

（小俣）お客さんの客層はシニアの方、親子、ファミリー層が多いですが、高校生や大学生は多くないですね。どうやらその年代は大宮とかに行くみたいです（笑）。

（細田）確かにそうかもしれません。さいたま新都心とか、都内に出るとか。あと、「こうのすシネマ市民カード」というのがあると伺ったのですが？

（小俣）はい、これは２０１３年にこうのすシネマがオープンした時から、市民の皆さん、市内に在勤、在学の方に「こうのすシネマ市民カード」を配布しております。このカードを劇場で提示して頂くと特別料金で映画を観て頂けます。さらに、期間限定ですが、鴻巣市の負担により、こうのすシネマ市民カードの提示により、鑑賞料金を一律ワンコイン、つまり５００円とし、広く市民に対して映画鑑賞の機会を提供することも実施致しました。

（細田）それは素晴らしいですね！

（小俣）近隣には、熊谷、羽生、久喜の商業施設に映画館がありますので、「こうのすシネマ」の観客数は飛び抜けて多いわけではありません。ただ、数字は別として、市民の皆様の映画館として、映画文化を提供させて頂くという目的の劇場は「こうのすシネマ」だけだと思います。

基本的にシネコンというビジネスも劇場毎に数字を競い合い、コストダウンにより利益を生み出して行く世界ですが「こうのすシネマ」は市民のための映画館ですし、この様な意義深い事

シアター内部　（写真提供：株式会社ティ・ジョイ）

多目的ホール　（写真提供：株式会社ティ・ジョイ）

業をやらせて頂けるのはありがたいことです。

（細田）本当に素晴らしいですね。とてもいい関係ですね。

（小俣）また、埼玉新聞社、キネマ旬報社との共催、埼玉県、埼玉県教育委員会、埼玉県内市町村教育委員会の後援により、「埼玉夏休み子供映画感想文コンクール」も実施しておりまして、こうのすシネマで表彰式を行っております。

こうのすシネマは映画館事業における官民連携の成功事例だと思いますが、鴻巣市民の方々に支えて頂き感謝しております。

（細田）今はコロナ禍で、すべての業界が大変ではありますが、いかがでしょうか？

（小俣）もちろん厳しいです。一昨年、昨年とコロナ禍による休業要請や営業時間の短縮、座席の制限等もございました。その一方で多くの根強い映画ファンの方々に支えて頂いている状況です。

（細田）それに対して具体的にどのような取り組みをされていますか？

（小俣）先ずはしっかりとした感染防止対策を行い、お客様に安心して鑑賞して頂ける環境を整えております。当社はコロナ禍以降、全劇場においてシアターの抗菌保護処理を定期的に行っております。

〈地域とつながり、みんな笑顔に、幸せに。〉

（小俣）あと、会社の方針で、劇場の現場では地域ときちんとつながりを作るというのがあるんですね。会社さんによっては劇場運営と地域営業をそれぞれ担当者を別にして切り分けて行っておられるところもあるようです。それに対して、うちの場合、劇場マネージャーが、地域の方との交流を持って、強いつながりを育むということを、こうのすシネマに限らず、全劇場で会社方針としてやっています。

例えば、地元の商工会にシネマチケットを作ってもらったりとか、大学の映画研究会の上映会に、うちの劇場を貸館として使ってもらったりとかですね。

（細田）地域としっかり連携されているんですね！地域連携や官民連携して、各主体がそれぞれの特徴を生かしながら、一緒に地域の課題に取り組んでいくという時代なのかもしれませんね。

（小俣）そうですね。確かに映画館であれば、間違いなくうちのスキルを活かせます。これからも官と民の垣根を取り払っていくことで、みんな幸せになることが出来るといいですね。

こうのすシネマのように、映画事業者が指定管理者になるのは珍しいですが、珍しいだけでなく、それで市民の方が幸せになるのはいいですね。もちろん我々も含めてですが（笑）。

〈映画をきっかけとする観光行動は、昔から存在〉

（細田）ここからは景観や、映画を活用した地域活性化の話になりますが、小俣さんは、それをテーマとして大学院で研究を行ったんですよね。

（小俣）はい、僕が研究したのはどちらかというと、映画事業の川上、というか、ロケ誘致の分野です。会社の事業とは、少し距離があります。私の会社は、ロケ誘致をしている訳ではなく映画館を経営しておりますので。ロケ誘致については、特にフィルムコミッションについて深く学ばさせて頂きました。

埼玉県においても、行田市を舞台とした映画「のぼうの城」など、公開されると同時に観光客も増加したと伺っています。また、アニメ「らき☆すた」の舞台である久喜市の鷲宮神社がいわゆるアニメの聖地の始まりであり、埼玉県は、もともとアニメの聖地巡りの発祥の地と言われていますよね！もちろん映画「翔んで埼玉」は別の意味で極め付けの作品ですが（笑）。

（細田）はい。埼玉県でも映画、アニメをめぐる話題は多いです。映画「翔んで埼玉」は、その後、県民性についての議論が巻き起こるなど、ある意味社会現象になり、まさにこの映画は、みんなが笑って観られるエンターティメントの神髄かと。

（小俣）はい。おかげさまで、映画「翔んで埼玉」は先ほどの、こうのすシネマの興行記録を塗り替える位のお客様に観に来て頂きました。

（細田）小俣さんが書かれている論文を拝読させて頂きましたが、「例えば、昔、映画『ローマの休日』を鑑賞して、映画をきっかけに憧れを抱き、多くの人々がローマを観光で訪れた」の件（くだり）が素敵ですね！

（小俣）いやいや、これは映画や文学と人間の観光行動をわかりやすく表現したつもりなのですが（笑）、我が国でも「歌枕」の時代から、またモノクロ映画の時代においても、観光の潜在的な需要は存在したんですよ。

そして２０００年以降に、地方自治体等において、映画製作を観光振興や、経済振興、シティ・プロモーションなどの地域振興に活用しようとする動きが活発になったんですね。結果的に全国各地にフィルムコミッションが設立されるようになりました。フィルムコミッションとは、映画やＴＶドラマ、ＣＭなどの映像制作者のロケを支援することで生じる様々な地域への波及効果を地域活性化へ繋げることを目的とする公的な団体のことです。

その後２００５年に、先述した埼玉県におけるアニメの「聖地巡礼」に代表される「コンテンツツーリズム」が指し示す意味として「地域に、コンテンツを通して醸成された地域固有の雰囲気・イメージとしての物語性、テーマ性を付与し、その物語性を観光資源として活用すること」と定義されたのです。

〈ロケ誘致の効果は、外的効果から内的効果へ。自分の地域への興味、再発見につながる〉

（細田）地域の景観といった地域資源を映画、ＴＶドラマを通じて地域振興に活用しようとする経緯はよくわかりました。

私の肌感覚では、まずロケをとにかく誘致したいという自治体もあれば、ロケをやり、映画やＴＶ放映され、話題になり観光客は来るようになったものの、ロケ地として注目されることを、どう受け止めて、どう地域活性化に役立ていくか、について悩んでいる自治体も多くあると思います。

その後、どうして良いかわからない、と。

小俣さんは、この問いに関してしっかりと方向性（外的効果・内的効果）を出されているので、その話をお伺いしたいと思います。

（小俣）はい。結論から言うと、フィルムコミッションは、行政内部の一組織やその外郭団体がやっていることが多いです。基本的に皆さん、観光を目的としているところが多いです。これは、観光分野を所管するセクションがやっていることが多いので、とにかく第一義的には、観光ＰＲが目的なのです。

つまり外から観光客を呼び込もうとする「外的効果」を狙っているわけです。

ただ、よく調べてみるとロケ誘致の効果って、それだけではないのかな、と。

実は、映画のロケには地域に良い影響を与えるという事、具体的には、ロケ前後で、地域の人たちの意識が変わるという部分があるというのを研究をやってて気が付いたんですよ！つまりロケにより、地域に「内的効果」が生じるのです。

埼玉県 歴史のみち景観モデル地区 まち歩き（2019 年、鴻巣市法要寺にて）

全国、どこの地域でも、そこに住んでいる人々は案外、「うちの地元って、あんまり良いとこないよね」なんて卑下していたり、自信がない、という感情を持つ人が多い傾向がある気がします。言うなれば自分の住んでいる地域への興味、愛着の部分で、モチベーションが低いんですね。

ところが、映画のロケを誘致して、撮影を行い、その画面に地域が映り込む、という、「非日常的機会」を経験していくと、市民の人たちの、自分たちの地元を見る目がどんどん変わっていくんですよ。

もちろんロケ後は、地域外の人も着目し、観光効果という結果に繋がる訳ですけど、市民の人たちがロケ誘致に関わり、ある時はエキストラとして参加する、つまり作品に関わることにより、自分たちの地域への興味、地元の再発見につながり、愛着やモチベーションが上がっていく、という事が検証出来たんですよ！

（細田）いやー、その話は凄いですね！最初は自分たちの地域のＰＲを目的としていたものが、自分たちの地域を見る目が変わっていく、というのは、まさに私が今取り組んでいる景観行政の理想形です！

埼玉県 歴史のみち景観モデル地区 景観まち歩き（2019 年、鴻巣市勝願寺にて）

埼玉県では県民の方の参加による「埼玉県　歴史のみち景観モデル地区　景観まち歩き」という取り組みを過年度から実施しています。県内にいくつかモデル地区を選定して実施しておりまして、もちろん鴻巣市も中山道の「鴻巣宿」としてそのモデル地区のうちの一つですが、ここ２年は新型コロナの蔓延で、休止しております。

それで、その取り組みの目的こそ、まさに今、小俣さんがおっしゃったように、地域内にお住まいの方が、自分の地域の素晴らしさに気がついて頂くきっかけになればと思っているんですよ。

小俣さんのおっしゃる「内的効果」ですね！

（小俣）本当にそうですね。まちづくりには、よそ者が必要だ、と言われますが、外からの目をきっかけに地域の方が自分たちの地域の魅力に気が付いて欲しいですし、そこが一番大切なのではないかと思います。

逆に、もし外部から多くの観光客が来ても、市民の方が冷めている感じだったら、地域にとって意味のないものになりますね。

（細田）本当にそう思います。

鴻巣市産業観光館「ひなの里」明治期の商家の蔵

〈ロケ誘致が地域にもたらすものについて〉

（小俣）やはり映画のロケを誘致すると、結果的に地域に何かしら残るんですよね。

地域によっては、映画のオープンロケセットがそのまま残ったり、映画の中で描いた地域の祭りをその後復活させて、観光地化しているところもあります。

（細田）それは素晴らしいですね！

（小俣）要は、映画のロケをきっかけに、建物（有形物）や祭事などのイベント（無形物）など、またこれが結構大きいんですが、ロケ誘致に関わった人間関係が残るんですよ。それをどう活用出来るかに尽きるのではないでしょうか。

ロケ撮影をやりました、ロケ隊は帰りました、で終わっちゃうと、何も残らないしもったいないですから。

（細田）確かにもったいないです。

（小俣）地域の人たちの、地元へのモチベーションが変わる、というのは本当に素晴らしいことなのです。そういう機会というのは、実は他にそんなに無いのではないかと思います。そこが映画が持つ力、素晴らしさなのかもしれません。

お金かけて地域にハコモノをつくるよりも、そこにはロケ誘致をきっかけに、それまで地元で気がつかなかった地域資源に光をあてて、地域の人々が、実は他から注目される素晴らしい魅力があったんだなと認識が変化する素晴らしさがあります。

〈映画制作を活用したまちづくりは、大規模なインフラを必要としない、ソフトパワーによるクリエイティブで持続可能なまちづくり〉

（小俣）つまり、「映画制作を活用したまちづくりとは、ソフトパワーによるクリエイティブなまちづくり、であり、大規模なハードインフラを必要としない、今後の時代に適した持続可能なまちづくり」とも言えます。更に言えば、「外来型の開発によるまちづくりではなく、ロケ撮影という非日常性の中で、既にそこにあった地域資源に新しい魅力を再発見し、長期にわたって活用してゆくまちづくり」であると思います。

そして、この「映画制作を活用したまちづくり」に関する全ての変化や波及効果の起点は、ロケ撮影という地域における「非日常的機会」を通して内外の人々が地域を見直す、新しいイメージを持つというところからスタートしています。

（細田）そして、その起点となるロケ誘致から撮影まで、地域のフィルムコミッションが活躍するわけですね。

〈フィルムコミッションの担当者の短期異動では、スキル、ノウハウが蓄積できない〉

（小俣）はい。ただ、課題も多くあります。

例えば、フィルムコミッションの担当の方が、３年に満たない期間で異動になったり…、実はこれは、映画制作における人的なリソースとしては影響がとても大きいんですよ。

　映像制作者側にとっては、以前のロケで、円滑なアテンドをされていた方に再度お願いしたいですし、まあ、これはどの業界でも同じかと思いますが、結局、人なんですよ。

（細田）それは良くわかります。もちろん組織で仕事をする訳なのですが、結局最後は個人というか、その個人の熱意とか、まあ、私の経験では、仕事は引き継げても人脈や人間関係は、そのまま引き継ぎづらいですね。当たり前の事かもしれないですが。

（小俣）あとは、行政では、フィルムコミッションの業務だけをされている専従者の数は非常に少ないんですよ。普段は観光課の他の業務をされていてロケ誘致の問い合わせがあった場合に、フィルムコミッションとして対応されるパターンがあったりします。

（細田）行政としては、耳が痛いお話ですが、その通りです。これは私の提案になりますが、そういうロケの誘致の際に、現在の担当者だけでなく、過去に経験のある職員を招集して、その仕事に携われるような柔軟な組織が実現すると良いですね。地域のためになるなら、経験者を迅速に集めて集中的に取り組むみたいな…。

（小俣）ほんとにそうです！そうしないとスキル、ノウハウが組織に蓄積されていかないですよね。その部分は残念ですね。

〈地方と首都圏、ロケの受け入れかた、活かし方はさまざま〉

（小俣）ロケは都内では迷惑行為だ、なんていわれることもあったりしますが（笑）、地方でのロケは結構歓迎されたりします。色々とサポートして下さったり、炊き出しをしてくださったりとか、本当にありがたいお話ですよね。

（細田）何となくそれはわかる気がします。小俣さんは大分県、私は石川県といった、地方出身ですから（笑）。

　都内とか、もちろん埼玉も含めて、ロケに慣れすぎちゃっている部分があるかもしれません。私もかつて、さいたま新都心関連の仕事をしている時にも、現場で何度かアクション物のロケに遭遇したり（笑）。

　もし、自分の出身地の地域で、映画やＴＶ等のロケがあると仮定したら、それはもう大事件ですね（笑）

地方出身者としては、都内も含め、ロケの多い首都圏はうらやましくて、もったいない気がします。

（小俣）そうですね、地方はその非日常的な機会をどう活用できるか、ですよね。

　でも、正直どう活用するかは本当に難しいです。あえて言いませんが失敗例はいくつもあります。

　確かに、ロケ、映画、ＴＶ等、１本来ました、というだけでは、そんなに大きな変化に繋がらない様に思います。それを何本も蓄積させて積み上げて継続の取り組みが必要ですし、その継続のためにはフィルムコミッションだけの力ではなく、市民の方の協力が不可欠の様です。

　また都内でのロケも迷惑だという方がいる一方で、商店街単位でのお声かけとかをしっかりすれば、エリア一帯の協力が得られることもしばしばあると伺っています。

（細田）なるほど、ある程度まとまった大きさのコミュニティの協力を得られることが必要なのですね！

（小俣）そうです！都内でも小さな〇〇通りのようなところで、ロケやりますのでよろしくお願いしま

す、とお願いさせて頂くと、理解と協力が得られたりすることもある様です。

（細田）もちろん、まとまれるコミュニティの大きさ、というものあるのかもしれませんし。

（小俣）それは、ありますね。地方は、もっとゆったり広範囲で、それこそ市単位でとか対応して頂ける、という傾向もあります。私の考えですが、協力して頂ける地域というのは、きっとその先にあるものを、前向きにとらえて、地域を自ら変えていきたいというモチベーションが高いのかと思います。

〈北九州フィルムコミッションは凄い。〉

（小俣）勢力的に活動している代表的なフィルムコミッションといえば、例えば政令指定都市である、神戸市、広島市とか北九州市とか…。

（細田）確かに北九州の映画ロケは凄い、と聞いたことがあります。

（小俣）とにかく市民の方が基本的にお祭り好きでロケをやること自体、歓迎されるという土壌はあると聞いています。

今から２０年以上前でしょうか、それまで北九州市は、公害とか、治安が良くないとかマイナスなイメージしかなく、そこを変えたいと。そこから映画のロケ誘致に力を入れ、今や、「映画の街北九州」と言われる位まで活動をされています。環境についても力を入れ、すっかり市のイメージが変わられています。

本当に力の入れようが凄かったらしいんですよ。ロケの要望に対する対応も、他では断るような爆破シーンも、「うちはやります」と、引き受けて頂ける場合が多かったと聞いています。

（細田）それは、凄いですね！

（小俣）もしかすると一度断ると来てくれない、というお気持ちで取り組んでおられたのかもしれません。映像制作者は都内が多いので、わざわざ北九州まで来てくれるとなると、何か他では出来ないことを提供しなくてはならないと。

他所で断られるような、爆破もやります、道路封鎖もやります、と。市民の方も本当に協力的な様です。

（細田）何を隠そう、実は私も少しフィルムコミッションに関わった経験がありまして・・

（小俣）え、そうなんですか？

（細田）実は、私は埼玉県庁から本庄市役所に派遣されたことがありまして、私が派遣されたセクションは、過去にフィルムコミッションの機能を持っていたんですよ。私が派遣された時は、商工会議所にその機能が移されていましたが。

（小俣）全国でもそういう例は多いですよ。

（細田）ちょうど、映画のロケ後で、市内に大規模なオープンセットを作って撮影をした余韻がまだ残っていたり、ＴＶドラマのロケのエキストラの募集について、市民の方に広く周知したりしました。

結果として平日に高校生がエキストラに参加するため、学校を休んだりして騒ぎになったり（笑）。

また、新幹線の本庄早稲田駅に近接して、早稲田大学のキャンパスを中心とした本庄早稲田国際リサーチパークがあるんですが、その中の施設が映画の編集作業を営業ベースでやっていたりと、仕事で少し関わったことがあるんですよ。そこで感じたことは、やはり市民の方のご理解とご協力が大切であることを痛感しました。

（小俣）埼玉で有名なのは深谷シネマさんですね。フィルムコミッション活動も連携されていてロケ誘致も熱心にやられてる様です。埼玉にもそういう事例があります。先ほどお話した、北九州のフィルムコミッションにも、いわゆる伝説のというか（笑）、熱心な方が以前おられて、若いころから撮影スタッフと交流を重ねて、最近では、若い頃あの人に世話になったから今も北九州で撮る、みたいな映画監督さんもいらっしゃる様です。

（細田）やっぱり、詰まるところ、最後は人なんですよね！義理と人情というか、信頼というか…。

私ごときが言うのははばかられますが、どうなんでしょう、フィルムコミッションも最近は結果として淘汰されているんでしょうか、冒頭にお話のあった、人事異動のサイクルとか、担当者、組織の熱意によっては続いていかないような気がします。

（小俣）まあ、予算とかもあるとは思いますが、直ぐには成果につながりにくい分野の様ですね。一時期、自治体でフィルムコミッションを立ち上げる、というブームみたいなものがありましたが…。

（細田）ありました、ありました。

（小俣）一旦、フィルムコミッションの看板は立ち上げました、が、ロケ誘致は思うように進まず、ロケは来たもののその後が続かない、と。なかなか待ってるだけでは難しいので、だから最近は自発的に観光ＰＶを作ったり、地域映画を製作されたり、また海外アジアからのロケ誘致に注力したりと主体的で幅広い活動をされている団体さんが増えている様です。

〈ロケ地は風光明媚じゃなくてもいい。地方はロケ地の宝庫。〉

（細田）小俣さんも私も地方出身で、今は首都圏で働いていますので、地方と首都圏の両方の気持ちがわかるというか、首都圏はロケの機会は多いけれど、その後どれをどのように活用していくかわからないし、地方は、自然景観や街並みは素晴らしいが、ロケ誘致そのものが難しかったり、何とかならないかと、もどかしい感じがします。

（小俣）まさしく細田さんの言う通りで、ロケ地というと、なんだか風光明媚なところじゃないといけないとか、思い込みがあると思うんですが、実はそうじゃなくて、地元の人から見ると、こんな廃れた光景が、なんて言うところが実はロケ地として価値があることもあるんですよ。例えば、茨城県にごみ処理場の跡地があり、廃墟みたいなのですが、ミュージックビデオとか、特撮物も含めて利活用されているらしいんですよ。北九州でも、港湾関係の古い建物があり、そこが昔の横浜、だとか、一昔前の港湾地区としてロケに利用されることもありますね。

鴻巣市　㈱マル武人形にて

（細田）今の横浜にはないけれど、今の北九州にある昔の横浜、ですね！
（小俣）そうです、そうです！今の横浜には残っていないけれど、北九州市の港湾地区には残っているとか、今の東京では撮れない昔の東京のイメージとか、地方にはそういうところが多く残っていますね。映像制作者からみると絶景であるような、そんな場所がまだまだ発掘できていないように感じます。
（細田）ただ、そんな素敵な場所は案外地元の人が気が付いていなかったり…。
（小俣）そうなんです。地方は未開拓のロケ地の宝庫なんです。今は廃れた飲み屋街も、実はロケ地としては昭和の雰囲気を醸し出していて魅力的だったり、立派な建物やきれいな光景がないから、ロケ誘致をあきらめる、という考えは違うのではと思います。

〈増える廃校。活用方法もさまざま。〉

（細田）そういえば、最近では、少子化により、埼玉県も含めて、全国で小中高問わず、学校の廃校が進んでいます。文部科学省のホームページでも確認でき、すごい数ですが、一方でその活用も様々な取り組みがあります。

　埼玉県の小鹿野町では３つの中学校が廃校になっていまして、ＣＭ撮影とかに使われています。一方で、狭山市では、廃校になった後に、ロケ地として活用されてきた中学校が取り壊され、今後跡地を含めた開発をしていくといった例もあります。

　もちろん、廃校にするか否かの判断、廃校を活用するか取り壊すか、どのように活用するのか、それは自治体の判断によりますが、答えは難しいですね。
（小俣）廃校でいえば、ずばり、最近映画館として再生されているところもあります。また廃校がアニメミュージアムとして再利用されている福島県の三春町の様なケースもありますね。

〈地域密着で、地域の人を笑顔に！〉

（細田）最後になりますが、改めて今、小俣さんがお考えになっていることがあれば教えてください。
（小俣）はい。うちの劇場の場合は地域密着をモットーにしていますので、まずは地域に住んでいる方に来て頂き、喜んで頂くことを一番にしています。

　今は、コロナ禍ですが、引き続き地域の皆様が笑顔になれるように取り組んで参ります。
（細田）本日は、ありがとうございました。
（小俣）ありがとうございました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

編集：埼玉県都市整備部田園都市づくり課　細田 隆

小俣 充（おまた みつる）

1970 年、大分県生まれ。東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 修士課程 修了

1994 年 東映株式会社入社後、2003 年より株式会社ティ・ジョイへ出向し、シネコン事業に関わる。

現在、同社 執行役員 経理部長。

併せて、内閣府 外国映像作品ロケ誘致プロジェクトの事務局メンバーも務めている。

細田 隆（ほそだ たかし）

1964 年、石川県生まれ。東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 修士課程 修了。博士課程 在籍中。

1989 年 埼玉県庁入庁後、都市計画分野を中心に、さいたま新都心関連事業、熊谷スポーツ文化公園整備事業、改革政策局首都圏整備担当、本庄早稲田駅周辺まちづくり等に従事、本庄市拠点整備推進局長、埼玉県西関東連絡道路建設事務所長等を経て、現在、埼玉県 都市整備部 田園都市づくり課長。

併せて、埼玉県景観行政連絡会議会長、埼玉大学工学部環境システム学科非常勤講師を務めている。

こうのすシネマ https://tjoy.jp/kounosu-cinema

こうのす LIFE こうのすLIFE/鴻巣市ホームページ（city.kounosu.saitama.jp）

埼玉県歴史のみち 広域景観形成プロジェクト https://www.pref.saitama.lg.jp/a1104/keikan-top/rekimichi-top.html

景観マガジン 埼玉スタイル S.Style no.5

発行：埼玉県都市整備部田園都市づくり課 2022 年 3 月

〒330-9301 さいたま市浦和区高砂 3-15-1